

学校だより

4月号

一中の桜並木

令和8年4月7日

「教育目標」

考える人 思いやりのある人

助け合う人 成しとげる人



連雀学園三鷹市立第一中学校

校長 宮城 洋之



令和8年度 第80回入学式「式辞」(抄)

校長 宮城 洋之

十数年前、ある新聞広告が話題になりました。新聞の1ページを丸ごと使ったその紙面には、ポロポロと涙をこぼしている「鬼の子ども」が小さく描かれています。そしてページの真ん中に子どものたどたどしい文字で、こう書かれていました。

「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました」

これは2013年の新聞広告コンテストで最優秀賞を受賞した作品です。「めでたし、めでたし？」という題名にはこんなメッセージが添えられていました。

「一方的な『めでたし』を生まないために。広げよう、あなたが見ている世界」

私たちはつい、物事を一つの側面からだけ見てしまいがちです。しかし、桃太郎にとっての正義が、鬼の家族にとっては悲劇かもしれない。この広告は、そんな「別の視点」の存在を私たちに突きつけています。

本校の教育目標は、「考える人」「思いやりのある人」「助け合う人」「成し遂げる人」の4つです。その最初に掲げている「考える人」の力こそ、まさにこの広告が示したような「多角的に物事を見る力」なのです。

もう一つ、例を挙げましょう。皆さんが小学校4年生で学習した新美南吉の「ごんぎつね」です。

この物語はこんな一文から始まります。

「これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です」

実はこの一文、物語のストーリーだけを追うなら、あってもなくても成立します。物語には茂平というおじいさんは登場しませんし、わたしという語り手も前面には出てきません。では、なぜこの一文が冒頭に置かれているのでしょうか。

物語は、いたずら好きの小ぎつね「ごん」が、村人の兵十のとったウナギを逃がしてしまうことから始まります。その直後に兵十の母親が亡くなったので、ごんは、あのウナギはおっかあに食べさせるためのものだったのではないかと後悔します。それから罪滅ぼしのつもりで、毎日こっそり栗や松茸を兵十の家へ届けます。しかし、その思いは伝わらず、最後には泥棒と勘違いした兵十に撃たれてしまいます。

この物語は、「分かり合えない悲しいすれ違いの話」と説明されることが多い作品です。しかし、本当にそうでしょうか。

もう一度、最初の一文の意味を考えてみましょう。この話は、「村の茂平というおじいさんから聞いたお話です」と書かれています。では、その茂平は、誰からこの話を聞いたのでしょうか。そもそもこの村にごんの物語を伝えたのは誰なのでしょう。ごんの最後を知っているのは、兵十だけです。ということは、最初にこの出来事を語ったのは、兵十以外にはありえません。

もしそうだとすれば、この物語は、ただのすれ違いの悲しい話ではありません。ごんの思いは兵十に届き、そしてその出来事は、兵十によって村の中で代々子どもたちへと語り継がれていく物語になったのです。

そう考えると、一見無駄に見えた冒頭の一文こそ、この物語の意味を深める、とても大切な一文に見えてくるのではないのでしょうか。

物事の見方は多様です。視点を変えることで別の世界や可能性が見えてきます。一見、無駄と思えるようなことに大切な意味があることもあるのです。それらを受け取ることができるかどうかで人生は大きく変わります。

筋道を立てて考える、目の前の物事の成り立ちを推測する、自分の感じたことを言葉にしてみる……一中での学習、部活動、行事、そのすべては、皆さんの「視野」を広げ、考える力を鍛えるためにあります。

三鷹市で最大規模の中学校である本校には、たくさんの、多様な考えをもつ仲間がいます。これから皆さんを待っているのは、最大規模の出会いとチャンスです。ぜひ、物怖じせずにさまざまなことにチャレンジしてください。